

P-188

効果的なこころのケア訓練への一考察 ～遺体安置所や黒エリアに焦点をあてて～

日本赤十字社和歌山医療センター 心療内科部¹⁾、神戸赤十字病院 心療内科²⁾

○倉山 正美¹⁾、村上 典子²⁾

【目的】被災者及び家族（遺族）ケアをブロック訓練にて計画・実施し、効果的なこころのケア訓練について検討した。

【方法】訓練は、遺体安置所と救護所（黒エリア含む）の2ヶ所で実施した。各こころのケア要員に、こころのケア指導者をつけて、心理的安全感を持てる環境を整えた。遺体安置所では、講義とロールプレイといったより構造化した訓練とした。要員・指導者（29名）に対し、属性や各訓練について無記名調査を実施した。

【結果・考察】救護所で「自己発見があった」指導資格者は86.7%、未資格者50%、「こころのケア技術が習得できた」指導資格者は73.3%、未資格者50%であった。「黒エリア後に気持ちを引きずった」指導資格者は33.3%、未資格者は75%と高かった。これは、指導資格者は訓練や研修、実地経験が豊富なために、事例で過度に動揺することなく、自己発見や技術習得という訓練本来の目的に達することができたと考えられ、訓練を積み重ねることの重要性がうかがわれた。また、救護所よりも遺体安置所訓練の方が「被災者理解・遺族理解に役立った」「自己発見があった」「こころのケア技術が習得できた」と参加者の評価が高かった。これは、遺体安置所訓練がより構造化された枠組みのため、学びが多かったと推測できる。訓練を「また受けたい」者も遺体安置所（86.7%）は救護所（69.6%）より多かった。訓練は構造化されたタイプの方が焦点づけた学びの機会を与え、参加者の満足度や学習動機を高めるのであろう。なお、指導者が良いと答えた者は87%で、構造化できない訓練では、経験者である初心者へのフォローが重要だと思われる。実地では、経験豊富なサポート役をつけることで、要員の心理的疲弊を防げると考えられる。

P-190

初めて吸引処置を行う患児に付き添う母親の不安を軽減する看護介入の検討

福岡赤十字病院 小児科

○山下 久美

【目的】当院小児科では、カテーテルを使用した吸引処置を実施する際、患児の安全のために母親に了承を得て抑制に協力してもらい吸引処置を実施することがほとんどである。しかし、侵襲を伴うカテーテルを使用した吸引処置を初めて受ける事は、児にとっても母親にとっても精神的負担が大きいと考えられる。その為、初めて吸引カテーテルを使用した吸引処置を体験する母親の気持ちを分析し、看護師のどのような言動が母親の不安軽減に繋がったのか、今後吸引処置において、母親がよりスムーズに処置に協力できるためにはどのような介入が必要かを明らかにしていく。

【方法・結果】吸引処置における看護師の説明・行動について、承諾を得られた母親にあらかじめ作成したインタビューガイドを使用し、約30分程度の半構成的面接を実施。インタビュー結果を逐語化し、意味・内容が類似するものを集めてカテゴリ分けした。その結果、〔吸引処置に対する理解〕、〔母親の思い・ストレス〕、〔看護師に対する要望・希望〕の3つのカテゴリに分類された。

【結論】看護師からの吸引処置の説明で母親たちは吸引処置を理解する事が出来ていたが、母親の理解度に応じて処置毎に説明を繰り返していく必要がある。その際、母親が処置や処置に伴う抑制に悲嘆な気持ちを抱いている事を考慮し、抑制する事が児の安全に繋がる事を十分に伝えるとともに、母親も児と一緒に頑張っている事を労う事が必要である。また、吸引の必要性を理解してもらうために意識的に吸引で取れた鼻汁の量や、SpO₂値の変化を母親に確認してもらうことで効果を実感してもらうよう働きかけていく必要がある。説明において、看護師は処置に対する統一した説明・方法と十分なアセスメントを用いた安全な抑制方法を行う必要があると考える。

P-192

夜間尿量800mlを基準としたおむつ交換の検討 ～個性を重視して～

徳島赤十字病院 看護部（消化器内科病棟）

○平野 瑞穂、宮本 みほ、梅津 麻朱

- はじめに急性期病院であるA病院のB病棟では排泄の認識がない患者は2時間毎におむつを確認しており、患者を起こしてしまうことがある。高齢者は少しの刺激でも中途覚醒しやすく、夜間のおむつ交換が睡眠に影響を与えると考えられる。そこで、おむつの吸収量から夜間尿量800mlを基準とし、おむつ交換を実施することで患者の睡眠への影響が軽減するのではないかと考えた。
- 研究方法対象：A病院B病棟の高齢者でおむつ使用中の尿失禁患者20名（吸引などの時間的な処置が必要ない患者、褥瘡、皮膚トラブルがない患者、1日に3回以上の水様下痢や下血がない患者）方法：対象者には連続3日間介入する。1) 1日目は2時間毎におむつ交換を実施し、1日尿量を測定する。そこから夜間尿量（22時から4時の6時間の合計尿量とする）を確定する。2) 2日目3日目は夜間尿量に応じておむつ交換間隔を設定する。（800ml以上は間隔を4時間、800ml以下を6時間とする）3)睡眠スケールを使用し睡眠状態の観察を行う。
- 結果 睡眠評価ではおむつ交換せず体位変換のみを行った時では41%、2時では16%と効果があった。また、夜間尿量が800mlを超える患者は3日目の1名のみであった。おむつ交換の間隔を6時間にしても尿漏れは1件のみで、皮膚トラブルは0件であった。
- 考察2時間毎のおむつ交換というものの中途覚醒の要因の1つであると考えられる。また個々の尿量と体型にあったおむつの選択と当て方の工夫により、おむつ交換の間隔を6時間に延ばすことは可能だと言える。
- 結論夜間尿量を把握しおむつ交換間隔を延ばすことで覚醒していた患者の睡眠評価は良くなった。

P-189

小児看護学の対象理解を深めるための工夫

姫路赤十字看護専門学校 看護学科

○内海 尚美、神戸真由美、名村かよみ、松井 里美、藤元由起子、藤田美佐子、中島 啓子、中林 朝香、谷口 真紀、山田 道代、柳 めぐみ

小児看護学において、成長発達を理解することは重要である。しかし、少子化の影響もあり、看護学生は子どもと関わる経験が乏しく、イメージがつきにくいようである。小児看護学実習で保育所の実習をとり入れている学校は多いが、本校では、講義でも幼児期と思春期の子どもと直接接する体験をとり入れている。

幼児期では母院の保育所に協力を得て、演習を実施している。目的は、幼児期の子どもに接する体験を通して、子どもの理解を深めるである。目標は（1）幼児期の子どもの成長・発達を観察する。（2）子どもと楽しく接することができる。（3）幼児期に起こりやすい事故の特徴に気付き、安全な環境を考えることができるとしている。学生6～7名を1グループとし、20分間子どもと関わる。看護学生は最初は声を掛けることに戸惑いもあるようだが、すぐに打ち解け、一緒に遊びながら子どもの遊び、食事、排泄、環境などを観察している。演習を終えた学生からは口々に「かわいい」という言葉が聞かれ、いつまでも子どもと一緒に遊ぼうとしている。演習後はテーマを決めグループでまとめて発表している。

兵庫県内の中学校では、職業体験の一環として「トライやるウィーク」を実施しており、母院で受け入れている中学生が当校にも来ている。その機会を活用し、思春期の理解のために中学生が授業を参観の様子を見たり、一緒に昼食を摂りながら直接接している。これをレポートにまとめ、思春期の対象理解に繋げている。

看護学生は演習のなかで、実際に子どもが生活する環境を子どもの目線で観察し、子どもと接する体験をすることで、子どもの成長発達の理解を深めている。

P-191

長期搾乳が必要となった母親が入院中から退院後にかけて経験する搾乳への思い

福岡赤十字病院 産婦人科

○佐々木 瑛里

本研究は、長期的に搾乳を継続する母親が抱く入院中から退院後にかけての心理を明らかにし支援の方向性について示唆することを目的とする。対象者はA病院で出産した母親のうち児が新生児治療室へ入院となった3名とした。入院中・退院後1週間前後に半構成的面接を行い、得られた内容をカテゴリ化した。入院中は【児が入院したことに罪悪感・寂しさを感じ】たり【分娩が大変だったと振り返り、まだ体調が万全ではないと感じる】など搾乳に対してすぐに気持ちが向かっていなかった。しかし徐々に【母乳の利点を意識】し【母乳分泌量増加を実感すること】や【児が元気にしている様子を見たり哺乳量が增加していること】【周囲の存在】等が励みとなり【児の哺乳量に見合う搾乳をどけなければならないという使命感】を感じ、搾乳を行うことにつながっていた。【退院後の生活について思いをめぐらせ】ており、退院後の生活を具体的に想像できるよう早期から搾乳に関する情報提供が必要である。退院後に経験する思いとして【児を母乳で育てているということが自信につながる】ケースと、搾乳量が減少することで【搾乳に自信が持てず児が退院した後の授乳を不安に思う】ケースがあり、長期搾乳は育児に対する自信にも不安要素にもなることが分かった。搾乳量だけで評価せず搾乳という行為に対する努力を認め自信がつくよう支援する必要がある。入院中から退院後にかけて共通した母親の思いとして、児の状態や哺乳量等の情報を医療者と共有することが長期搾乳を行う母親の励みとなっていた。その一方で、児の状態が話題の中心となり搾乳に関する悩みを表出できる場が少ないことが示唆された。そのため産科・小児科スタッフ間で児の状態・母親の思い・搾乳状況に関する情報共有を行い継続的な支援が重要であると考える。

P-193

尿漏れしないおむつ交換を定着させるための取り組み

名古屋第一赤十字病院 西棟10階A病棟

○加藤留美子、園田 玲子、須永 康代

<取り組みの背景>おむつの勉強会後に吸水性の良いおむつを使用して、一か月間モニタリングを行った。その後約3か月ほどは学習の効果があり、学んだ技術がうまくいき、尿漏れなくシーツや寝衣の汚染はなかった。しかし、多忙な業務の中、新しいおむつの当て方を習得して実践することは負担が大きく、有効なおむつを当てる方法は定着しなかった。理由として1.尿取りパットを陰茎に巻く方が簡単2.意識障害のある体格のいい患者も一人でおむつ交換を行うことが多く、患者を側臥位にしてアウターとインナーを組み合わせての使用は大変。3.尿漏れすると寝衣交換が必要になるため尿取りパットを重ねる。4.尿取りパットを陰茎に巻く習慣があり簡単に変えられない。5.前任者がやっていたおむつの当て方を変えることはできない。などであった。しかし、尿漏れのある患者にインナー（尿取りパット）を何枚も重ねることで鼠径部に隙間を作り、おむつの脇から尿が漏れ、寝衣やシーツが汚染する。一日に何度も寝衣とシーツ交換を行うため患者の負担も大きく、看護師の業務量も増える現状であった。

<改善策>1.学習した尿漏れしない方法でのおむつ交換の実施をスタッフに統一する。2.実際に患者にアウター（外側のおむつ）とインナー（尿取りパット）の使用方法を実施して結果を確認する。3.毎日の患者ケアでおむつの当て方を実践・指導できるスタッフを増やす。4.購入するおむつを患者家族に説明する。

<まとめ>最近のおむつは素材が改良され、吸水性が増して皮膚への影響も少なくなっている。看護師がおむつの知識をもって漏れないおむつの当て方を実践することで、患者の生活環境を快適にすることができるよう指導したい。